

ジジウラスの思想における人間と自然とのかかわり —ギリシア正教の人間理解からみた、環境問題への取り組み—

島 村 絵 里 子

要旨

本論では、ギリシア正教の神学者ジョン・ジジウラス (John Zizioulas, 1931-2023) による現代的課題の一つである環境問題への取り組みに注目する。そこで東西のキリスト教の緊張を超え、すべての人間の共通の課題としての環境問題に対峙するために、ジジウラスがどのような創造理解および人間理解を展開したかを検討していく。その為、まずジジウラスが環境問題の所在をどのように古代から現代に至るまで通史的にキリスト教思想の内に捉えているか概観する。次に、ジジウラスが、東方キリスト教の人間理解の枠組みの内に見出している、環境問題の解決へ向けての足掛かりを、人間の限界（無からの創造と人間の墮落）とあるべき人間の姿（人格、かかわり、自由）との対比を通して確認していく。さらに、ジジウラスが現代の文脈で、東方キリスト教の伝統を再解釈しつつ提唱している「祭司としての人間」が有する環境問題に対する取り組みの有意性について示唆したい。

1. はじめに

本論では、ギリシア正教の神学者ジョン・ジジウラス (John Zizioulas, 1931-2023) による現代的課題の一つである環境問題への取り組みに注目する。イヴ・コンガールは、ジョン・ジジウラスを「我々の時代で最も独創的かつ深遠な神学者の一人」と評している¹。またジジウラス研究者のヤロスラフ・スキラはジジウラスを「エコロジカルなエキュメニスト」および「エコロジカルな司教」として評価している²。

まず現代のキリスト教におけるジジウラスの環境問題への取り組みを理解するため、彼の略歴³を確認したい。ジジウラスは、1931年に、ギリシアのコザニスで生まれた。1950年から1954年の間、テッサロニキ大学とアテネ大学で神学の基礎を学んでいる。その後、博士課程への準備として、ジュネーヴにあるボセーのエキュメニカル研究所に在籍した。このボセーでの学びは、彼がエキュメニズム（教会一致運動）への関心を持つきっかけとなった。1955年、ジジウラスはハーバード大学 (Harvard Divinity School) の博士課程で研究を開始した。そこで2人の著名な神学者、ジョルジュ・フロロフスキー (1893-1979) とポール・ティリッヒ (1886-1965) と出会う。ハーバードでは、フロロフスキーの指導のもとで証聖

者マクシモスのキリスト論に焦点を当てた研究を行った。ジジウラスは、同時期にテッサロニキ大学の博士課程で、A.G. ウィリアムズの指導のもと、初期3世紀における教会の統一、司教、聖体（エウカリスチア）の研究を行い、1965年、アテネ大学で博士号を取得した⁴。

博士課程修了後、ジジウラスは、さまざまな神学の研究機関⁵で教鞭をとりつつ、神学研究とエキュメニカルな対話に専念した。1986年にジジウラスは、ギリシア正教会のペルガモン府主教に叙階される。その後、ジジウラスは教会における指導的な立場から、エキュメニズム（教会一致運動）とエコロジカルな正義に取り組んだ⁶。

ジジウラスの経歴から明らかなように、彼は西方の文脈の中で神学の研鑽を積みつつ、東方と西方という異なるキリスト教思想の中に身を置きながら、両者の現代的な対話の可能性を模索した。その中で、ジジウラスは、西方のキリスト教の中で顕著な、人間を「個」として捉えようとする人間中心主義的な傾向を批判し、東方キリスト教の伝統の中でもギリシア教父の思想にみられる「かかわり」から捉えられた人間理解に焦点を当てている。

そこで本論では、東西のキリスト教の緊張を超え、すべての人間の共通の課題である環境問題に対するジジウラスの人間理解が有するインパクトについて検討していく。まず、ジジウラスが環境問題の原因をどのように捉えているかという点を思想史の観点から概観したい。次に、ジジウラスが、創世記に描かれている天地創造、人間の堕落をどのように捉えているかを、神の像、理性、自由、ヒュポスタシスといった概念を手掛かりに確認していく。さらに、ジジウラスがどのように現代の環境問題の解決のための糸口として「祭司としての人間」モデルを提示しているかを検討していく。最後に、ジジウラスの思想が有する対話可能性について示唆したい。

2. ジジウラスの問題提起

ジジウラスは、アメリカの歴史家リン・ホワイトの主張を取っ掛りにして、ユダヤ教およびキリスト教の中で、どのように人間と自然との関係が捉えられてきたかを歴史的に分析している⁷。リン・ホワイトによれば、キリスト教は、『旧約聖書』の創世記1章にある「地を従わせ、支配せよ」という記述を基に、人間が、神から自然の支配を許されたと解釈した。そこから人間と自然とを二分法的に捉え、人間を自然の上位に置き、自然を人間の欲求を満たす手段とした。このキリスト教の態度が今日の環境破壊の真の原因である。キリスト教は、環境破壊という問題に対して有罪であり、重い責任を負っていると批判している⁸。

ジジウラスは、リン・ホワイトの主張に対して、全面的に反対せず、環境問題が東方正教会をも含む西洋の知的伝統に起因していると言えるという。そしてユダヤ・キリスト教が、どのように神・人間・自然の関係を捉えてきたかを、批判的な観点から通史的に概観している。以下、ジジウラスがどのように各時代の自然理解の問題点を捉えているかを追っていきたい。

1) ヘブライ人とギリシア人の自然理解

ジジウラスは、西洋の知的伝統への批判をヘブライ人とギリシア人の自然理解から始めている⁹。彼によれば、ヘブライ人にとって重要なことは、救済の歴史における神の介入であり、自然は啓示において二次的な役割を果たすものにすぎない。ジジウラスは、ヘブライ人が有する世界観で中心に位置付けられているものは、預言者のことばとその解釈および終末論的な歴史観であり、そこで被造界における人間の積極的な役割に焦点を当てる宇宙論に十分に注意が向けられていないと言う。

他方、古代ギリシア世界はヘブライ人とは反対に、歴史ではなく自然に関心を寄せた¹⁰。古代ギリシアの思想家にとって、歴史の流れとは、移ろいやすい、不確かなものであり、秩序が見出せないものとして、疑わしく、信頼に値するものではなかった。そこで彼らは、天体の規則的な動き、季節の移り変わりのサイクルなど、自然の内に美と調和を見出すことを重視し、宇宙論を展開していった。

ジジウラスは、歴史的観点も宇宙的観点も欠くことができないものであり、両者の関係を分離せず統合していったのが、初期キリスト教の思想家たちであったと評価している。このキリスト教思想の積極的な側面については、本論、「4.3. 創造の祭司としての実践」で取り上げたい。

2) プラトン主義とグノーシス主義

ジジウラスは、古代キリスト教思想（2世紀と3世紀）において影響力をもったプラトン主義とグノーシス主義が、創造の重要性を軽視しているとして批判している¹¹。彼は、プラトン主義的な思想が、汎神論的な傾向を持つこと、またこの世界を不完全なものとみなし、永遠の「イデア」の領域に属する善と美を熟考し、それを受け入れることによってこの世界を超越できると捉えている点を問題視している。他方で、彼は、グノーシス主義が、第一に、物質世界は本質的に悪であり、霊的世界は善であるとみなしている点、第二に、創造された世界は善良で愛情深い創造主の作品ではあり得ないため、創造はデミウルゴス、つまり下位の神によるものとしている点、第三に、グノーシス（特別な知識または隠された知識を有すること）を通じて、邪悪な自然世界から逃れようとした点をジジウラスは問題視している。そこでジジウラスは、プラトン主義とグノーシス主義に対抗するものとして、「無からの創造」というキリスト教の教義を位置付けている。この点については、次節 3.1 で確認したい。

3) アウグスティヌスとボエティウス

さらにジジウラスは、中世の思想家として、アウグスティヌスとボエティウスについて言及している¹²。ジジウラスによれば、アウグスティヌスは新プラトン主義の影響を受け、救いとは、魂の救いであって、身体性が切り捨てられてしまっている点を指摘している。またボエティウスをはじめとする中世の思想家は、人間存在の意味を、もっぱら人間の知性と理

性のはたらきといった内面性に見出すこと、つまり人間の超越的存在へ向かう内的はたらきと、至高であり永遠の存在である神との関係性について語ることにのみ集中し、この世界における人間と自然との関係性について積極的に語っていないと言う。

4) 宗教改革・啓蒙主義の時代

西洋の人間を中心に据えた知的伝統は、近世においては、ベーコン、デカルト、カントなどの啓蒙主義の哲学者たちに引き継がれていく¹³。ジジウラスは、一つの例として、「人間は自然の主人であり所有者である」というデカルトのことは挙げつつ、人間の知性・理性の能力が物質的世界よりも優位に置かれていた時代であると解釈している。またジジウラスは、プロテスタンティズムにおいても、カルヴァンが「地を従わせ、支配せよ」(創世記 1:28)という聖書のことは、直接的にも間接的にも、経済の資本主義的な見方を推進するものと見なした点を批判的に捉えている。

5) ダーウィンとアインシュタイン

ジジウラスは、意図せずキリスト教の創造論に寄与した世俗的思想として、ダーウィンとアインシュタインを挙げている¹⁴。

ダーウィン主義が、人間が被造物の中で唯一の知的存在ではなく、意識や自己意識さえも物質世界に存在し得ると主張している点に注目している。つまり動物と人間の違いは理性そのものではなく、理性を持ち、または使用する程度にあると言う理解が、あまりにも人間中心主義に偏ってしまったキリスト教の創造理解の軌道修正の役割を果たしうると捉えている。

そしてアインシュタインの量子物理学について、ジジウラスは、「自然または実体と出来事との二分法(二元論)の終焉である。つまり空間と時間が一致しており、すべてのことは同時に起こる。そして、世界そのものが一つの出来事、行為であり、時間の中で行われる儀式と切り離して考えることはできない¹⁵」という解釈を展開している。

自然科学は、人間を自然世界から孤立した存在として捉えず、自然の一部として研究対象とする。ジジウラスは、このような自然科学のパラダイムは、超越的存在を排除するものの、被造物におけるキリスト教の人間中心の世界観の軌道修正に寄与しうるものとして評価している。

3. 環境問題の解決の糸口となるキリスト教の人間理解

前節では、リン・ホワイトの問題提起に応える形で、ジジウラスが各時代のキリスト教思想の内に見られる人間中心的な傾向をどのように捉えているかを概観した。ジジウラスは、西洋の知的伝統を批判しつつも、広い意味で西洋の知的伝統の中に、つまり特

に初期キリスト教および東方キリスト教の教父たちの思想に、環境問題の解決の糸口を見出そうとしている¹⁶。言い換えるならば、東方キリスト教の教父たちの思想を、文献学的に解釈することではなく、現代の問題に照らしつつ解釈することを通して、キリスト教思想の軌道修正の可能性を探っている。この節では環境問題の取り組みにおいて、ジジウラスが土台に据えている人間理解について確認したい。ジジウラスの人間理解の鍵となるのが、1) この世界の創造についての理解、2) この世界における人間のあるべき姿と現実との緊張関係、3) 神とのかかわりを回復することにより、自然（被造物）とのかかわりを回復していく人間のあり方である。

3. 1. Creatio Ex Nihilo の解釈の可能性

ジジウラスは、この世界が存在する意味を、キリスト教の教義の一つである「無からの創造 (creatio ex nihilo)」を東方キリスト教の教父の思想から読み解く試みをしている¹⁷。ジジウラスは「無からの創造」には「物ではないもの (no thing)」ではなく、「何者か (some one)」つまり神のみがこの世界を創造するということが含意されていると捉える¹⁸。したがって、神の超越性の外に、永遠の命を与える神と並行して存在する現実、既存の物質世界のようなものは存在しない。さらに言うならば、創造の行為と創造の維持は、絶対的な自由を有する三一的な神の中から生まれるものであり、直接的であり、神以外の媒介者は存在しない¹⁹。つまり「無から」を語る際には、永遠の三一の神が、創造の絶対的な起源であり、永遠の三一の神のうちに、被造物に命を与え続ける力があると解釈している。

このように「無からの創造」という教義は、神の自由（意志）と超越性を前提としている。さらに神と、神によって創造され存在するようになったこの世界との間にある関係性を問う。そこでジジウラスは「創造された存在は、これらの条件（時間、空間）に従属しており、これらの条件は神と世界、創造された存在と非創造的な存在の違いを示すだけでなく、世界を実在的に規定する²⁰。」と述べている。ジジウラスは、「無からの創造」が含意することとして、創造は無から生じたため、すべてのものは最終的に無に帰することになるということ、被造物は「有限」であり、終わり、つまり死が暗示されている、ということを指摘している²¹。

3. 2. 人間の墮落

ジジウラスは、被造界における人間の位置づけを明確に捉えるために、人間の墮落について言及している²²。彼によれば、アダムの罪によって、この世界に死がもたらされたという理解は誤りである。先に見た「無からの創造」から捉えるならば、アダムが罪を犯す前から、この世界は、有限であり死すべきものであった。つまりアダムの罪によって、この世界に死がもたらされたのではなく、アダムが罪を犯す前から、死すべきものであった。

聖書（創世記1章26節）には、人間が、神によって、神に似たものとして、「神の像 (Imago Dei)」として造られたと述べられている。ここで神の像とは何を意味するかが問題となる。

ジジウラスは、東方の教父たちの思想を要約し、神の像としての人間とは、理性（ロゴス・logos）、つまり理性的な生き物であり、理性を通して、被造物で、神の像を映し出す（reflect）役割を担っていると解釈する²³。ロゴスとしての人間の役割は、多様化し、断片的に存在しているものからなるこの世界（cosmos）に、調和と統一をもたらすことである。

理性に加え、人間が神の像として、行使することが求められているのが「自由」である²⁴。人間は、自らの理性をどのように用いるかを任されている。このように神の像である人間はまた、創造にとって「所与のもの」、つまり被造物としての限られた自由と向き合わなければならない²⁵。換言すれば、人間は、神の像として、この世界とかかわることを通して、この有限な世界と無限な神との結び目となるか、または、自己を中心に据え、自己の欲求を実現するために絶対的な自由を求めるという、二つの自由の行使の方向性のうち、どちらに進むかを自ら決めるという岐路に立たされていると言えよう²⁶。

創世記によれば、アダムは、禁じられていた果実を食べることにより、神のように絶対的な自由を持つもののようにふるまうことを選んだ。ジジウラスは、人間が、禁じられた果実を食べることにより、神の像として、神との交わり（コムニオン）にある存在として、この世界を、無限なものへと高めていくことに失敗したと捉えている²⁷。さらにジジウラスは「なぜ人に絶対的な自由を与えながら、その自由の使用に制限を設けるのか？」と問いかけ、「悲劇とは、自由がその達成に向かって突き進むものの、達成することができないことで生じる行き詰まりのことである²⁸」と述べている。

3. 3. かかわりの中にある人格（ヒュポスタシス）

ジジウラスは、このような悲劇的状况に置かれた人間に与えられた「希望」に注目している²⁹。被造物自体には永遠に生きるための内在的な要素は何もない。なぜなら、死は完全な自然的絶滅を意味するからである。しかし彼は「キリスト教の信仰が愛と希望を拠り所になっている以上、もし神が愛から世界を創造したのであれば、その世界の生存に希望があるはずではないか」と修辭的に問いかける。世界の救済への信仰に対して、「終末の時に神が奇跡的な方法で介入するだろう」と言うことにより単純に答えることは出来ず、三一的な神とのかかわりの中に、被造物や人間が救われる道筋をさぐることで、つまり三一の神と人間との「人格（personhood）」的なかかわりの意味を探る必要があると言う³⁰。

ジジウラスは、主著の一つである *Being as Communion* において、あらゆる人格を「ヒュポスタシス（hypostasis）」として捉えることの必要性について焦点を当てている。「ヒュポスタシス」とは、関係的なもの、存在を構成する実在の仕方であり、具体的な関係性の中で構成された、具体的に存在するもの、その存在の絶対的な唯一無二性を指し示す³¹。彼は、人格は、関係性つまり「交わり（コムニオン・Communion）」を離れて理解することはできないと述べている³²。

ジジウラスの「ヒュポスタシス」としての人間理解を支えているのが「三一的な神

(Trinity)」における三つの「ヒュポスタシス」のあり方についての理解である。ジジウラスは、特にカッパドキアの教父たちが展開した三位一体論の現代的解釈を試みる³³。そこで彼は教父たちが三一の神を起源関係から捉えていることに注目する³⁴。「父」は「子」と「聖霊」が存在する原因となるが、「子」と「聖霊」は「父」を条件づける。ジジウラスは、神的「person」である「父」「子」「聖霊」の存在を、三者が共有している本質から生じたものとしてではなく、またそれ自身で自存している自己意識的・理性的な「個」としてでもなく、「関係的なもの」として捉える。つまり神において、存在自体が関係から切り離されえない。「父」は生れざるものであり、「子」は生まれるものであり、「聖霊」は発出する。「父」「子」「聖霊」は互いに、それぞれの固有の关系的なあり方、その唯一無二性を損なうことなく、一つの交わりを構成する。換言すれば、「父」「子」「聖霊」は完全な愛の内にあるゆえに、交わりとして存在する。ジジウラスは、「神の存在は人格的な関係と人格的な愛を通してのみ知られる。存在は生命を意味し、生命は交わりを意味する³⁵」と述べている。つまり彼は、「神は交わりの中にある存在」ではなく、「神の存在が交わりである」、「神は交わりとして存在する」という解釈へと至る³⁶。

このような三一的な神との交わり（コムニオン）から、「ヒュポスタシス」としての人間のあり方が捉えられていく。神内の三つの「ヒュポスタシス」、つまり「父」、「子」、「聖霊」のどれもが、他の「ヒュポスタシス」から切り離して考えることはできないように、人間存在は、孤立した「個」としてではなく、他者との関係性の中で捉える必要があると主張する。ジジウラスにとって、「ヒュポスタシス」とは「他者」であることの自由を意味し、孤立した存在は「ヒュポスタシス」とは言えない。なぜなら、自由とは「他者から自由であること」ではなく、「他者のために自由であること」を意味するからである³⁷。さらに彼は、「父」「子」「聖霊」の交わりに招かれた「ヒュポスタシス」としての人間のあり方を、「自由は愛と同一のものとなる。神が愛であるのは、神が三一であるゆえに、である。我々が愛することができるのは、私たちが人格である時、つまり他者が真に他者であることを許しながら、なおかつ我々と交わりを持つことができるときだけである³⁸」と述べている。

この人間の「ヒュポスタシス」としての人格が有する自由の理解が、創世記1章28節で語られる人間に委ねられた神の被造物とのかかわりのあり方、つまり神の像としての人間固有の使命を理解する上で鍵となる。自由は、孤立ではなく、交わりを通じて被造界の中で実現される。ジジウラスは、「人間の手に委ねられることで、物質的な被造物はその限界から解放され、被造物自体が人格的な次元を獲得し、人間化される³⁹」と述べている。またジジウラスは「もし各人が、被造物を扱う際に個人ではなく人格として行動すれば、被造物を人間のレベルに引き上げるだけでなく、それを全体性、つまり相互に関連する存在の普遍性として見ることができる。これにより、被造物は、今日の自然科学が観察しているように、その構造自体に内在する統一性を実現することが可能になる⁴⁰」と述べている。このような枠組において、ジジウラスは、人間の「ヒュポスタシス」としてのあり方が意味することを、より一般的なことばで表現するならば、「自然の全体性を体現し、表現するアイデンティティ⁴¹」

であると述べている。この「ヒュポスタシス」としての人間理解が、「創造の祭司」としての人間理解へと展開していく。

4. 環境問題に取り組むための視座

前節では、ジジウラスによる東方キリスト教の伝統の中で捉えられた創造理解（「無からの創造」と「人間の堕落」）、および人間理解（三一的な神の交わりの中に招かれたと人間の自然に対する自由と責任）」について確認した。そこで人間が、この世界で、いかに神とのかかわり、他者とのかかわりのみならず、自然とのかかわりを深めていく使命を課題として引き受けていく存在として神によって創造されたかを概観した。さらにこの節ではジジウラスが、これらの創造理解と人間理解を、終末に向けて新しい「文化」を創り出す「創造としての祭司」という観点から捉え直すことにより、どのように現代の環境問題に取り組むための足掛かりとしているかを検討していきたい。

4. 1. 新しい「文化」の模索：「ethic」から「ethos」へ

ジジウラスによれば、環境問題は「霊性」の問題、換言すれば自然のもつ神聖さを顧みない「文化」の危機である⁴²。ジジウラスは、「ethic（倫理）」と「ethos（精神・気風）」との区別に注目している⁴³。「ethic」は、何が正しいか、何が間違っているかを見定めるもの（原理原則）であり、教育によって学ぶことができるものである。それに対し、「ethos」とは、人が生まれ育った家庭や社会の中でその一員となることで得られる性向（habitus）つまり態度の問題であるとする。そこで必要なのは、人間の道徳心を中心とした「ethic」のみに環境問題の解決策を見出すことなく、エウカリスチアと神との交わり（コムニオン）を中心に据えた「ethos」に支えられた「文化」の創出であると言う。

4. 2. 「創造の祭司」としての人間

先に見たように、ジジウラスは、西洋のキリスト教思想が、長らく人間中心的な観点から、自然の「所有者・主人（possessor・proprietor）」として自然を支配する「個」として人間を捉えてきたことを批判している。近年、「所有者としての人間」モデルを乗り越える、自然（創造）の「管理人（stewards）」としての人間のあり方が注目されてきた。ジジウラスは、「管理人」のモデルを評価しつつも、自然に対する人間のかかわりを「管理人」ではなく、自然（創造）の「祭司（priests）」⁴⁴と捉えることによって開かれる新しい「文化」のあり方を提唱している⁴⁵。

1) 創造における人間の「祭司」としての役割

まず「管理人（stewards of creation）」と「祭司（priests of creation）」という二つのモデルが前提としている人間と自然とのかかわりを、ジジウラスがどのように対比している

かを見たい⁴⁶。

「管理人」のモデルでは、人間が「何をするか」ということによって、人間の自然とのかかわりを捉える。そこから、人間の自然への態度（自然の保全・管理）が問われ、具体的な行動のあり方が、倫理的そして道徳的に問われる。結果として、自然破壊を行うこと、自然法則に従わないこと・背くことが、不道徳、倫理に反することとなる。

他方、「祭司」のモデルでは、人間が「存在している」こと自体に焦点を当て、そこから人間の自然とのかかわりを捉える。人間は、自然に対し、機能的に関わっているのではなく、存在論的に関わっている。エコロジーは、存在そのものの次元（エッセ）の問題であって、単に振る舞い（良く在ること）の問題ではない。人間は、自然を破壊することによって、人間として、存在することを止めることになる。そこで、エコロジカルな自然環境に対する罪は、単に道徳的なものでなく、人間としてのあり方の根幹にかかわる実存的なものとして捉えられる。

2) エコロジーに文化的次元をもたらす創造の祭司としての人間像

ジジュラスは、人間を「創造の祭司」として見る視座は、エコロジーに文化的な次元を付与すると言う。そして「文化」を、移ろい行くものを高め、一時的なものを何か永続的なもの、永遠の価値があるものとするとして捉える必要があると言う。例えば、芸術家が創作活動を行う時、その人は、永遠の価値や重要性を持つものを生み出すことを願う。その意味で、「祭司」は芸術家である。芸術家は、ちょうど司祭が、エウカリスチアにおいて、パンとぶどう酒を手取るように、その手で儂い自然が、永遠の神的な意味を得るようにするために、自然の世界を表現していく⁴⁷。

人間を「創造の祭司」として捉えることにより、エコロジーの意味が根本的に変化することとなる。この観点は、自然破壊の恐怖といった消極的な意味で、人々に自然を尊重するように働きかけるのではなく、人々を自然への愛といった積極的・能動的な意味でエコロジーを捉えることへと向かわせる。つまり祭司として、自然を管理するのではなく、自然を包容することへ、そして自然保護を単に感傷的なものとして捉えるのではなく、存在論的な次元を意味し、人間の存在、実存にかかわるものとして受け止めていくことへ向うことになる。

3) この世界の可能性を切り開く創造的な人間のあり方

ジジュラスが考えるエコロジーの文化的な次元は、自然の発展と相反するものではない⁴⁸。人間は、自らの手の内にある素材を、自然である状態より良いものへと変容することへと招かれている。つまり自然は、ありのままで保存されるべきではなく、人間の介入によって、改善される可能性を有している。エウカリスチアにおいて我々が捧げるのは、単なる小麦粉とぶどうではなく、パンとワインである。つまり自然の要素は、人間の労働によって変容していく。所有者のモデルと異なり、人間の手という媒介を通すが、人間存在や人間の利益に終始せず、感謝の行いによって、創造の実りを神へと返すことへと向かう。

ジジウラスは、人間が神と自然とを媒介することを可能とする人格の二つの側面について語る⁴⁹。「創造の祭司」としての人間は、先に確認したように、世界に統一と交わりをもたらす「ヒュポスタシス」的な存在であるが、さらに自己の境界線を超え出て神、他者、自然の存在の肯定へと向かう「エクスタシス (ekstasis)」的な存在である。エクスタシスとは、自分自身の限界を超え、「交わり」へ向けて、愛である神へと進み出ること、つまり他者を肯定する動き、全体性からの自由、自身のために自由となることを意味する⁵⁰。

このようにジジウラスは、現代の生態学的危機をユダヤ・キリスト教の人間中心主義に起因していると評価しているにもかかわらず、彼の神学における司祭職は、「支配的な管理」という観点ではなく、「交わり」という観点から、人間中心主義に戻る。ただし、「交わり」の内にある、あるいは「他者」との関係にあるということは、人間が自然の「上」に立つのではなく、自身を超え出て、自然との「交わりの中に」あるいは「その中に」立つことを意味する⁵¹。

「創造の祭司」として、人間は被造物を自身へと統合するだけでなく、それを存在の源である神に捧げる。人間が被造物を神に捧げることにより、被造物は有限性から解放され、超越へと捧げられる。この「祭司職」は、狭い意味でキリスト教、特にギリシア正教の祈りの実践についてのみ語っているのではなく、すべての人間の実存的なあり方（神の像としての人間に課せられた使命）を含んでいる。つまりこの「ヒュポスタシス」的および「エクスタシス」的であるという人間の二つの側面は、意識的かどうかにかかわらず、あらゆる人間的な活動を包含する、より広い存在論的態度を指している。

4. 3. 「創造の祭司」としての視座

先に見たように、人間は「ヒュポスタシス」として神とのまじわりの中にあり、神から与えられた理性と自由を行使し、この世界で「創造の祭司」として生きていくことが求められる⁵²。動物は、動物としての理性 (rationality) を持ち、自然の内にはたらく道理を見出し、活かすことによって自然環境に適応していく。動物と人間が自然を活かすことの違いはどこにあると言えるのか。人間の理性の働かせ方が課題となる。人間の理性は、歴史と文化を創り上げることを可能とする⁵³。ジジウラスは、「創造の祭司」として、人間の創造性を開花していく道のりを、「エウカリスチア (eucharistia)」と「禁欲主義 (ascetism)」の観点から捉えている。

1) 創造の祭司の糧としてのエウカリスチア

そこでジジウラスが目しているのが、初期キリスト教の典礼 (liturgies) の実践である。彼によれば、初期キリスト教は、ヘブライ人の歴史への関心とギリシア人の創造への関心の両方を取り入れ、一つの世界観、「宇宙論的預言 (cosmological prophecy)」へと統合した⁵⁴。そこで重要な点は、この世界観が、常に終末という未来を見据え、条件付けられて

いるということである。つまりジジウラスは、この終末論的な世界観が、歴史と創造とのダイナミズムを捉える視座を与えてくれる点に注目している。

そしてジジウラスは、使徒時代以降、終末論と結びついた歴史（時間）と自然（空間）という2つの観点から発展した「エウカリスチアの宇宙論（eucharistic cosmology）」に注目している。エウカリスチアの宇宙論により、この世界は有限なものであり限界があるものの、創造主である神から委ねられたものであり、人間が神に捧げることにより超越しうると捉えている⁵⁵。ジジウラスにとって、この初期キリスト教の自然観（世界理解）に基づくエウカリスチア理解に立ち返ることが、現代の環境問題に取り組む鍵となる。

2) 禁欲主義的なあり方における創造性

さらにジジウラスは、古代教会の実践の中でも特に「禁欲主義（ascetism）」が環境問題を考える上での糸口であると言う⁵⁶。多くの場合、禁欲主義は、自然への敵視や物質的世界に対する蔑視と関連づけられるが、それらは例外的なものであると言う。『砂漠の師父の言葉 Gerontikon』には鳥たちの死を嘆き悲しみ、野生動物たちと平和に暮らす隠修士たちの姿を見ることができる。今日のアトス山でも蛇や昆虫と暮らしている修道者がいる。そこにある神学的思想は、人間の中にある「神の像」は、人間の精神においてのみならず、人間の身体にも見出すことができるというものである。そこでジジウラスは、苦行が、自己の利己的な意志、自己の満足のために外的な世界の支配を克服することと結びついていると言う。

ジジウラスは、隠修士の苦行の実践を現代の文脈において捉え直し、実践してゆくことを提唱している⁵⁷。彼は度々、自然環境の危機は霊性の内にあると言う。現代において、人は、神に対してだけでなく、自然をも含む隣人に対して「エコロジカルな罪（ecological sin）」を犯している。そこですべての被造物の苦しみに目を向ける「エコロジカルな禁欲主義（ecological ascetism）」の必要性を説く。自己の欲望の赴くままに自然の資源を使い果たしていくのではなく、その使用を制限していくことによる自然との調和の必要性を見ている。

5. ジジウラスから手渡された課題

以上、ジジウラスによる環境問題に対するキリスト教の責任についての通史的な分析、環境問題への取り組みの土台となりうる東方キリストの教父たちの創造理解と人間理解、それらの理解を現代の文脈で捉える「創造の祭司」の可能性について素描してきた。最後にジジウラスの人間理解の視座が、現代社会にもたらしうるインパクトについて検討し、本稿の「むすび」としたい。

5. 1. 環境問題への取り組みにおけるエキュメニカルな視点

ジジウラスは、ギリシア正教の人間観を軸に据えつつも、その人間理解に、すべての人間

に見出しうる普遍的なあり方を見出すことができると確信している。ジジウラスは教皇フランシスコの回勅、『ラウダート・シ』を、自身が考えるキリスト者としての環境問題への取り組みの姿勢と合致するものとして大きく評価している。

その一例として、アシジの聖フランシスコと東方キリスト教の隠修士の自然（被造物）に対する思いやり・共感の共通性に注目している。

ジジウラスは、特に『ラウダート・シ』が持つ、エキュメニカルな重要性について評価している⁵⁸。異なる教派間の対話、異なる文化間の対話といった二つのエキュメニカルな活動に加え、ジジウラスは今まで殆ど顧みられることがなかった三つ目の次元を「実存的なエキュメニズム」と呼んでいる⁵⁹。各自が属する教会（制度的な背景）や文化の相違という制約を超え、この世界に生きる人間であるという共通の立場から、現代社会における共通の問題に取り組むことを意味する。そこでジジウラスは、今日の「実存的なエキュメニズム」が一番取り組むべき課題の候補として環境問題があがることを指摘し、『ラウダート・シ』がまさにこの三つ目のエキュメニズムの視点から、環境問題に取り組んでいる姿勢を評価している。

5. 2. ジジウラスの歴史観が示すもの

ジジウラスが、現代の環境問題の解決の糸口としたのが、現代に至るまでの過去の思想の変遷を振り返るという取り組みである。そこで彼は、その時々精神風土 (Ethos) に注目し、人間と自然との関係性の捉え方の不十分さを捉えている。ジジウラスの主張を言い換えるならば、この世界（神による創造）を理解する時、我々は、自然を副次的なもの、または知性と対立するものとして捉え、人間の知性的なあり方と神との関係性にのみ注意をむけるのではなく、自然が持つ可能性と固有の役割を見出すことに目を向ける必要がある。つまり彼は「神の被造物である自然とのかかわり抜きに、人間がより人間らしくあることが果たして可能であると言えるのか」と問う。

さらにジジウラスは、「自然は静的な実在 (entity) ではなく、人間の自然へのかかわりも静的ではない。未来を見据えることなく、環境問題の倫理的課題に取り組むことはできない」と言う⁶⁰。その中で彼は、自然科学を絶対視することに対して警鐘を鳴らしつつも、自然科学と神学との両方に、環境問題に対して責任があり協働的な姿勢をもつ必要性を示している⁶¹。

またジジウラスは、ビザンティンの文化様式を回顧することを通して、その時代に返ろうとすることは、不可能であり、望ましいことではないと強く主張している⁶²。初期キリスト教（過去）の実践から学び、現代の文脈でそれを活かすことに挑むことが必要であると言う。換言すれば初期キリスト教のエウカリスチア的な世界観、正教の祈りの実践の有意性を、現代の文脈において、新しく見出すことを挑戦として捉えている。そこからさらにギリシア正教のみならず、エキュメニカルな視点から現代におけるキリスト者として教会固有の使命を問うこと

へと向かう。人類共通の危機である環境問題の解決のためには、祈り（エウカリスチアとコムニオン）が中心的位置を占め、そこから倫理原則を識別していくような新しい文化が必要となる。この新しい文化のあり方を「創造の祭司」として捉える課題に、日本人キリスト者としてどのように応えることができるであろうか。そこでジジウラスが自然をめぐる西洋の知的伝統について歴史的に検証していったように、東洋、特に日本の自然観の変遷を捉えていくこと、現代の日本の文化的な動向を識別していくことが求められているのではないかと思う。

注

- ¹ Yves Congar, “Bulletin d’ ecclésiologie,” *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, 66(1982), p. 88.
- ² Jaroslav Skira, “The Ecological Bishop: John Zizioulas’ Theology of Creation,” *Toronto Journal of Theology*, 19/2 (Fall 2003), p.202. 以下 The Ecological Bishop と表記。
- ³ ジジウラスの経歴の詳細については、<https://zizioulas.org/person/biography/chronology> を参照。
- ⁴ 提出された博士論文のタイトルは、“Eucharist, Bishop, Church: The Unity of the Church in the Divine Eucharist and the Bishop During the First Three Centuries”である。
- ⁵ 1970－1973年に、エディンバラ大学で教父学を担当、1973－1987年にグラスゴー大学で組織神学の教鞭をとっている。他にもジュネーヴ大学（スイス）、グレゴリアン大学（ローマ）、キングスカレッジ（ロンドン）で講義を担当している。また1986年から、テサロニケ神学院にて、教義神学を担当している。
- ⁶ ジジウラスは、1980年後半から、総主教庁 Ecumenical Patriarchate において環境問題への取り組みを先導していった。コンスタンディヌーポリス総主教のヴァルソロメオスによって創設された宗教と科学について取り組む委員会で代表を務めている。
- ⁷ John Zizioulas, *Priests of Creation: John Zizioulas on Discerning an Ecological Ethos*, John Chryssavgis, Nikolaos Asproulis(eds), (Bloomsbury T & T Clark:2021). pp.9-10, pp.93-103. この著書には、ジジウラスによる環境問題を主題とした記事、論文が収録されている。以下 *Priests of Creation* と表記。
- ⁸ リン・ホワイト、青木 靖三（翻訳）『機械と神——生態学的危機の歴史的源泉』みすず書房、1972年を参照。
- ⁹ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation Lecture I,” pp.97-99. “Preserving God’s Creation Lecture I-III は、”*King’s Theological Review*, vol.XII-XIII,1989-90, Sourozh 39(1990): pp.1-11;40(1990):13 (1990):pp.31-

40;41(1990):pp.28-39. に掲載されたものである。

¹⁰ Ibid., pp.97-99.

¹¹ Zizioulas, *Priests of Creation*, “An Orthodox Response to the Environmental Challenge”, pp.74-75. この記事は *So that God’s Creation Might Live: The Orthodox Churches Responds to the Ecological Crisis, Proceedings of the Inter-Orthodox Conference on Environmental Protection*. Crete 1991 (Bialystok; Ecumenical Patriarchate, with Sydesmos,1991), pp.19-25 に掲載されたものである。

¹² Zizioulas, *Priests of Creation*, “An Orthodox Response”, pp.75-76,

¹³ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture I,” p.101; “Proprietors or Priests of Creation,”pp.144-145.

¹⁴ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture I,” pp.101-103,

¹⁵ Ibid., p.102.

¹⁶ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture II,” pp.103-106.

¹⁷ Zizioulas, *Priests of Creation*, Introduction, pp.11-14.

Cf. Skira, *The Ecological Bishop*, p.202. スキラは、ジジウラスの「無からの創造」の概念が、十分に練られていない点を指摘している。ジジウラスは「創造以前には何も存在しなかった」と述べているが、時間の創造以前の「前」「後」について時間的に語ることは可能か、またジジウラスは「創造の前には何も存在しなかった」と言うが、存在の創造以前の「存在」について語ることは可能かという疑問を投げかけている。そこで、スキラは、ジジウラスが「無から」(ex nihilo) の創造について言及する時、創造の行為の前に「無」や空虚が存在していたという意味ではなく、神の外に現実が存在しないことの否定として、否定的な意味で用いる傾向があると解釈している。

¹⁸ Skira, *The Ecological Bishop*: John Zizioulas, p.203.

¹⁹ Zizioulas, *Lectures in Christian Dogmatics*, ed. Douglas H. Knight (New York: Titlark, 2008), p.83.

²⁰ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture II,” p.112.

²¹ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture III,” p.118.

²² Ibid., pp.124-125.

²³ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Proprietors or Priests of Creation?,” p.148.

²⁴ Ibid., p.148. ジジウラスは、ここでの「自由」とは、ニュッサのグレゴリウスが autexousion (αὐτεξούσιον) と呼ぶものであると述べている。

²⁵ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture III,” p.123.

²⁶ Ibid., p.119, p.127.

²⁷ ジジウラスの「無からの創造」と「アダムの堕落」についての解釈には、証聖者マクシモスの影響がある。

- ²⁸ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation: Lecture III,” p.123.
- ²⁹ Ibid., p.125.
- ³⁰ Ibid., p.118.
- ³¹ J. Zizioulas, *Being as Communion*, Being as Communion: Studies in Personhood and the Church, (St Vladimirs Seminary Press;1997), p. 106. 以下 *Being as Communion* と表記。
- ³² Zizioulas, *Being as Communion*, p.16.
- ³³ ジジウラスの神学的議論において多く言及される教父には、カッパドキアの教父（大バシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス）の他に、エイレナイオス、証聖者マクシモスがいる。
- ³⁴ ジジウラスはカッパドキア教父たちに従い、父の「唯一原理性」（モナルキア (monarchia) 主義）の立場を取る。
- ³⁵ Zizioulas, *Being as Communion*, p. 16.
- ³⁶ Ibid., p. 41.
- ³⁷ Zizioulas, *Communion and Otherness: Further Studies in Personhood and the Church*, T&T Clarkp,1997, p.17.
- ³⁸ Ibid., p.17.
- ³⁹ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture III,” p.128.
- ⁴⁰ Ibid., p.128.
- ⁴¹ Ibid., p.128.
- ⁴² Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture III,” pp.126-132; “Proprietors or Priest of Creation?”, pp.144-153; “Toward an Environmental Ethics,” pp.160-171.
- ⁴³ Zizioulas, *Priests of Creation*, p.225
- ⁴⁴ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture III,” p.130; “Proprieties or Priests of Creation?”, p.150. この祭司職のモデルは明らかにキリストである。ジジウラスは、キリストが十字架と復活を通して、アダムが果たせなかったことを成し遂げた創造の体現者、あるいは万物の再統合 (anakephalaiosis) であり、世界の救い主として卓越した存在であると述べている。
- ⁴⁵ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Proprieties or Priests of Creation?”, pp.144-171.
- ⁴⁶ Ibid., pp.151-152.
- ⁴⁷ Ibid., p.151.
- ⁴⁸ Ibid., p.152.
- ⁴⁹ Skira, *The Ecological Bishop*, p.205.
- ⁵⁰ Zizioulas, *Communion and Otherness*, p. 213.

⁵¹ Skira, *The Ecological Bishop*, p.203.

⁵² Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture III,” p.120.

⁵³ Ibid., p.128.

⁵⁴ Skira, *The Ecological Bishop*, p.201.

⁵⁵ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture I,” p.98.

⁵⁶ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture II,” pp.104-105.

⁵⁷ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture III,” p.127.

⁵⁸ Ibid., p.127.

⁵⁹ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Pope Francis and Laudato SI”, “p.219. この記事は、Dietric Werner and Elizabeth Jeglizka (eds), *Ecotheology, Climate Justice, and Food Security* (Globethics.net:2015), pp.179-186 に掲載されたものである。

⁶⁰ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Toward an Environmental Ethic,” p.169.

この論文は、Neal Ascherson and Andrew Marshall (eds), *The Adriatic Sea, a Sea at Risk, a Unity of Purpose, Religion, Science and the Environment*, (Athens: Text Ltd Publication, 2003), pp.93-101 に掲載されたものである。

⁶¹ Zizioulas, *Priests of Creation*, “Religion and Science,” p.179.

この論文は、Sara Hobson and Lawrence Mee(eds), *The Black Sea in Crisis: Religion, Science and Environment, Symposium II*, (London: World Scientific Publishing Company: 2000) に掲載されたものである。

⁶² Zizioulas, *Priests of Creation*, “Preserving God’s Creation; Lecture I,” p.105.